

GINGA REPORT 401

No. 93
2023.2

そらんぼ四日市 検索

発行日：令和5年2月1日
編集&発行：四日市市立博物館・プラネタリウム
電話：059-355-2700

2月の星空

星図：ステラナビゲータ11/(株)アストローツ

星探しの目印

2月15日21時の星図

宇宙のバラの花

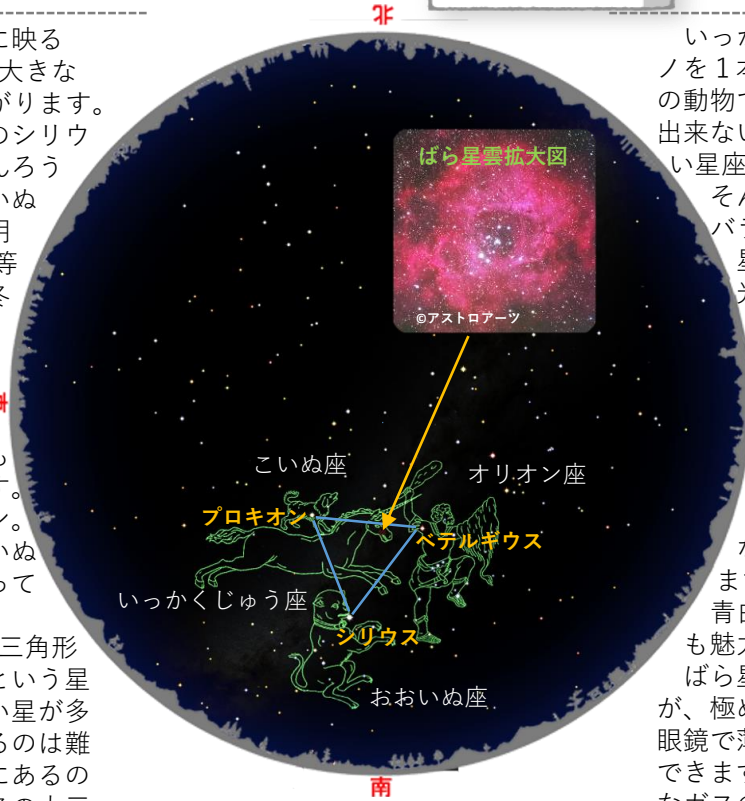
南の空を見上げていくと目に映る3つの一等星。これらを結ぶと大きな三角形、冬の大三角ができあがります。

まず一つ目が、おおいぬ座のシリウスです。中国では天狼星（てんろうせい）と呼ばれており、おおいぬ座にもぴったりの名前です。明るさは-1.5等なので、他の一等星よりもずいぶん明るく、冬の空ではシリウスを探すのが何よりも近道です。

二つ目は、赤く輝くオリオン座のベテルギウスです。肉眼で観望できる恒星の中で最も直径が大きいといわれています。

残るはこいぬ座のプロキオン。意味は「イヌの前」で、おおいぬ座よりも先に、はしゃいで昇ってくるこいぬが想像できます。

この3つの星を結んでできた三角形の中には、いっかくじゅう座という星座があります。残念ながら暗い星が多いため、その姿をイメージするのは難しいですが、冬の大三角の中にあるので位置はわかりやすいです。冬の大三角から探してみてもいいでしょう。



いっかくじゅう座はひたいに長いツノを1本はやしたユニコーン、想像上の動物です。街中では一切見ることが出来ないため、存在を知らない方も多い星座です。

そんないっかくじゅう座の中には、バラとそっくりな形をした「ばら星雲」が輝いています。4600光年（光の速さで4600年かかる距離）のところに浮かぶ、直径80光年もの巨大な宇宙のバラの花といったところでしょうか。

ばら星雲は、星間ガスが淡く広がっている天体です。中心には青白い若い星々が群れになって誕生しているのがわかります。赤く輝く星間ガスの中、青白い星のコントラストがとても魅力的です。

ばら星雲を肉眼でみるのは困難ですが、極めて条件の良い空の下なら、双眼鏡で薄らとその形を確認することができます。花びらが重なっているようなガスの広がり、みなさんはどう感じられるのでしょうか。

今月の天文トピック

50年周期のチャンス シリウスB

冬の夜空で一際目につくおおいぬ座のシリウスは、言わずと知れた全天で一番明るい恒星で、「焼き焦がすもの」という意味があります。

シリウスは肉眼では1個の星にしか見えませんが、実は二つの星がお互いに回り合う「連星」です。明るい主星の方をシリウスA、暗い伴星の方をシリウスBとしています。ただし、主星シリウスAと伴星シリウスBとの明暗差、両星の間隔等の関係から観察するのは容易ではありません。条件が整えばシリウスAのまばゆい輝きのすぐ傍らに、シリウスBのかすかな光点を見つけることができます（図1）。

その条件が整っているのが、ここ数年です。シリウスBは主星であるシリウスAの周りを約50年で楕円軌道を描いて1周しています（図2）。今回約50年ぶりにシリウスAより最も離れた位置にあり、見やすい時期を迎えています。日本の冬場は大気の揺らぎが激しく、星の像が乱れやすいので観察しづらいかもしれませんが、この機会を逃さないようにしたいですね。

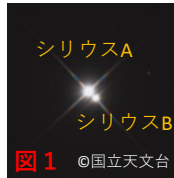


図1 ©国立天文台

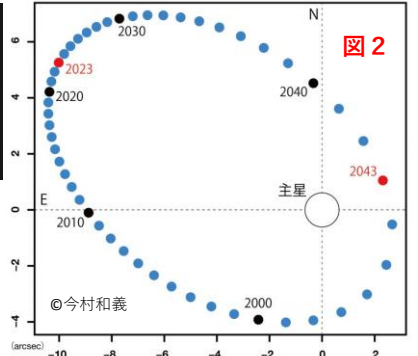


図2

©今村和義

博物館主催 スターウォッチング

博物館主催きらら号観望会

日時：2月25日（土）19:00～20:30
場所：博物館前市民公園
内容：月・火星・木星を見よう



※当日受付・参加無料です。
※天候不良時は中止です。（通常3時間前に決定します）
※マスク着用、手指消毒をお願いいたします。

編集後記

寒い日が続いていますが、少しずつ春を感じられる日もでてきました。しかし、まだまだオリオン座やおおいぬ座など、冬の星座が春の星座に主役を取られまいと輝いています。冬の星座の煌びやかな輝きをしっかりと目に焼き付けておきたいですね。

プラネタリウムも整備休館を終え、2月11日から投映を再開いたします。沢山の方のご来館お待ちしております。

2月の月

6日  満月

14日  下弦

20日  新月

27日  上弦